

14

News Letter



巻頭言
2024年度大会
学生参加報告
優秀発表賞報告
受賞コメント
国際学会参加報告

2024. Dec.

動物の行動と管理学会

巻頭言 副会長挨拶

竹田 謙一 (信州大学)



はじめに、9月の2024年度大会の開催にあたり、準備から当日の運営にご尽力いただいた東海大学農学部伊藤秀一先生をはじめ、学生の皆様へ感謝申し上げます。また大会担当理事の皆様にも感謝いたします。多くの会員にも参加いただき、大変盛大な大会となりました。

大会開催にあたっては、これまでの経緯もあり、日本畜産学会の大会に前後して3月に開催されていました。しかし、本学会の独立性等を重視し、日本畜産学会とは切り離して実施しようと、本学会の大会は秋開催になりました。秋開催の第1回目は2020年度の酪農学園大学を会場とする大会でしたが、残念ながら、2020年度大会は新型コロナウイルス感染症の蔓延により中止となりました。

その後、2021年度のオンライン大会、2022年度の横浜でのハイブリッド大会、2023年度の酪農学園大学でのリベンジ大会、そして東海大学での2024年度大会。会員の皆様の積極的な参加もあり、いずれも盛會に終えることが出来ました。その一方で、他の関連学会の大会開催も9月を中心に行われることもあり、参加したい(できる)大会が重複する事例や、夏季集中実習への対応により参加できない会員が比較的多いこと、3月に卒業、修了する学生会員が発表できないなどといった声も聞こえてきました。現在役員を中心に、大会開催時期について議論が始まったところです。少しでも多くの会員が参加できる大会開催が期待されます。会員の皆様からも積極的なご意見をいただけましたら幸いです。

さて、大会と言えば、同時に開催されるシンポジウムも見どころです。2021年度のシンポジウムから異分野の研究者を講師にお招きして、新たな研究のヒントとなる、また認識を新たにさせられる興味深い講演がありました。私たちの主たる研究は、動物行動の真理を追究したり、それらの行動を飼育環境下、ヒトとの接点がある自然環境下でいかに制御していくか、調和させていくか、このような狙いが主眼にあると思います。動物行動学は基礎学問であると同時に、動物行動を制御し、動物を管理していく場面は応用学問としての視点が必要不可欠です。応用場面を取り巻く社会的環境は日々変化しており、私たちの研究手法、解決策の提示も、激動する社会の変化に合わせて、進化(深化)していく必要があります。とりわけ、最近のシンポジウムや研究発表で取り上げられているコンピューター(ロボット)インタラクション、ドローンやAIを活用した行動研究、飼育管理研究は、ますます研究の輪が広がっていくでしょう。また、本年度のシンポジウムにもあったエンドユーザー(消費者、入園者など)との接点、新たな法規制下での現場対応などについても、本学会での研究発表が今後、期待されることです。会員の皆様におかれては、本学会に新風を吹き込むためにも、異分野で活躍されている方をぜひ、本学会にお誘いください。

最後になりますが、このニュースレターも残すところ最終回のみとなりました。ニュースレターでは、学会誌だけでは伝えられない本学会の雰囲気、活動の様子を伝えていただきました。現担当の萩原慎太郎さん(福山市立動物園)をはじめ、これまでに担当いただいた皆様へ感謝申し上げます。

2024年度大会 学生参加報告

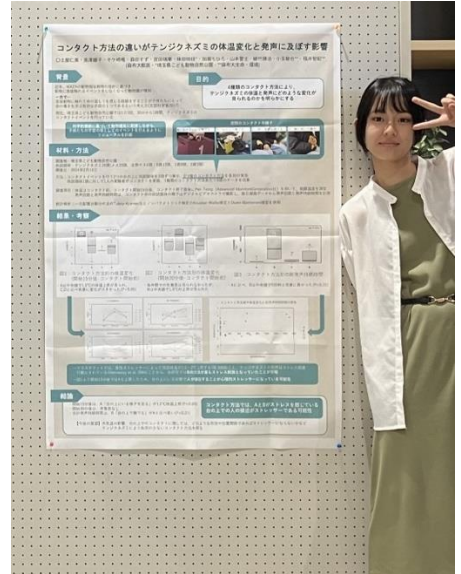
土屋 仁美 (麻布大学獣医学部動物応用科学科)

2024年9月11日から13日にかけて開催されました『動物の行動と管理学会』に参加しましたので、報告いたします。

私は『コンタクト方法の違いがテンジクネズミの体温変化と発声に及ぼす影響』というテーマでポスター発表をいたしました。これは、どのようなコンタクト方法が動物福祉的に適切であるかを検討するため、埼玉県こども動物自然公園様協力のもと、コンタクト方法別で体温変化と総発声持続時間に注目しました。その結果、現在行っているコンタクト方法がストレス刺激となっている可能性が考えられたという発表でした。本来なら麻布大学内でのポスター発表のみだったところ、学会発表のチャンスをいただけたため、事前練習もかねて研究メンバー全員で参加させていただきました。かなり背伸びをしたチャレンジであったり、まだ研究室に所属していない2年生のため知識が浅かったり、そもそも飛行機の搭乗方法がわからなかったりなどと不安要素はかなりありましたが、実際にやってみるととても楽しかったです。誤字があるなどと詰めが甘い発表でしたが、先生や動物園関係者、大学院生の方などにアドバイスや賛辞をいただき、学ぶことが多く難しかった一方で、うれしかったです。この研究は麻布大学独自のプロジェクトのため、1年半で終わるものだと思っていましたが、今後が気になるから続けてほしいやこれを踏まえて次の研究に臨んでほしいという意見をいただけたため、機会があればもっと精密にやりたいと思いました。

また口頭発表や公開シンポジウムを聞き、同じ分野でも別の視点から見ることや別分野の専門家と協力することで発想の転換や様々な問題、未発見の事実がたくさん存在しているのだと感じました。発表スライドは全体的に見やすくわかりやすかったため、授業で扱ってほしいくらいでした。優秀発表賞対象の口頭発表は動物園動物の行動をメインとした発表が多く見られましたが、一般発表は家畜動物の行動をメインとしたものが多かったと感じました。今までは、動物園動物や野生動物などの好きな分野を研究するのは楽しそうだなと思っていましたが、この学会を通じて酪農家の負担を減らすような社会のためになる研究にも興味がわきました。

この3日間のすべてが初めての出来事でしたが、とても有意義な時間でした。この経験を、これからの研究室選びや卒論などに生かそうと思います。最後になりましたが2024年度大会の開催にあたり、素晴らしい運営に携われた関係者の皆様、加瀬先生に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。



2024年度大会 優秀発表賞報告

田辺 智樹 (大会担当・北海道立総合研究機構酪農試験場)

優秀発表表彰は口頭発表の学生会員を対象とし、今大会では18題のエントリーがありました。今大会は、昨年の宣言通り、東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパスで実施することができました。大会期間中は9月とは思えないような暑さ、学会が終わったタイミングに降り出すゲリラ豪雨、と過酷な気候ではありましたが、新築のキャンパスはとても快適でした。大会参加者は100名程度と昨年の北海道開催に劣らず熊本においても多くの会員の方にご参加いただき、発表会では活発な質疑応答もみられ、発表した学生にとっては良い経験になったのではないのでしょうか。優秀発表へのエントリー数は昨年と同程度、演題内容は動物園動物や家畜などバラエティに富んでおり、どの演題もスライドや説明に工夫がなされていてとてもわかりやすい発表でした。



個人的には、若手(学生)の研究者が発表中の質疑応答だけでなく会場外でも活発に交流していたことが印象的でした。この学会で築いた若手どうしのつながりはこの先も大切にしたいと思います。次回の大会については開催時期や開催場所は未定ですが、今大会に引き続き次大会でも学生会員の皆様には積極的に優秀発表にエントリーしていただけることを期待しています。

最後に、お忙しいなか審査員を引き受けていただいた先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。
ありがとうございました。

厳正なる審査の結果、以下2名の方を今大会の優秀発表者として決定いたしました。

江原 達也 さん (麻布大学大学院 獣医学研究科)
「来園者数が繁殖期および非繁殖期の飼育下フンボルトペンギンの行動に及ぼす影響」

佐藤 大地 さん (北海道大学大学院 情報科学院)
「飼育下のツシマヤマネコの発情兆候把握に向けたAIによる行動検出」

優秀発表賞 受賞コメント

江原 達也 (麻布大学大学院 獣医学研究科)

2024年度大会において、優秀発表賞という大変名誉ある賞をいただき、非常に光栄です。

また、日頃から御指導いただきありがとうございます加瀬先生をはじめとした諸先生方、観察を手伝っていただいた研究室の皆様、そして御多忙の中、2か月間に渡り、ペンギンに加速度データロガーの着脱作業に御協力いただいた埼玉県こども動物自然公園の皆様方に対し、この場を借りて深く御礼申し上げます。

本学会は、私にとって初めて参加する学会でした。そのため、学会の雰囲気や自分の研究内容について参加者の

の皆様が興味を持ってくださるか大変不安でした。しかし、懇親会や口頭発表後に多くの方々から質問や助言を頂き、大変うれしく感じたと共に、自信になりました。

私の研究では、加速度データロガーと行動観察を併用して、来園者数がフンボルトペンギンの行動に与える影響を調査しました。研究を通して、2つの手法を併用することで、それぞれの長所を活かし、新しい研究成果を得ることができるということを実感しました。

最後になりますが、いただいたこの賞に恥じぬよう日々精進してまいります。



優秀発表賞 受賞コメント

佐藤 大地（北海道大学大学院 情報科学院）

2024年度大会において、「飼育下のツシマヤマネコの発情兆候把握に向けたAIによる行動検出」と題して発表させていただき、優秀発表賞をいただきました。北大情報科学院の佐藤大地です。本発表では、絶滅危惧種であるツシマヤマネコのAIによる睡眠の検出と、発情兆候行動である尿スプレーの検出について発表させていただきました。まずは普段からご指導いただいている研究室の先生方や京都市動物園の職員の方々、ツシマヤマネコの結核、さすな様には感謝を申し上げます。

本学会には初参加かつ、AIというあまり馴染みのない分野での発表だったのですが、優秀発表賞をいただけたこと、非常にうれしく思います。限られた発表時間の中で研究内容の説明や、そもそもAIがどんなものなのかという説明を論理的にできたことが受賞に繋がった要因と考えています。

現在、AIの応用領域は広範囲に広がっており、今回発表したような動物の行動管理効率化へ向けた応用もその一つです。ただ、人間がAIに求めることをAIが完璧にこなしてくれるかというところではなく、人間の介入が必要な部分も数多く存在しているため人間とAIとの協働が必要だと考えています。今よりもAIが社会に浸透し、人間とAIで協働して動物を効率よく管理する時代がくれば良いと思います。



国際学会参加報告

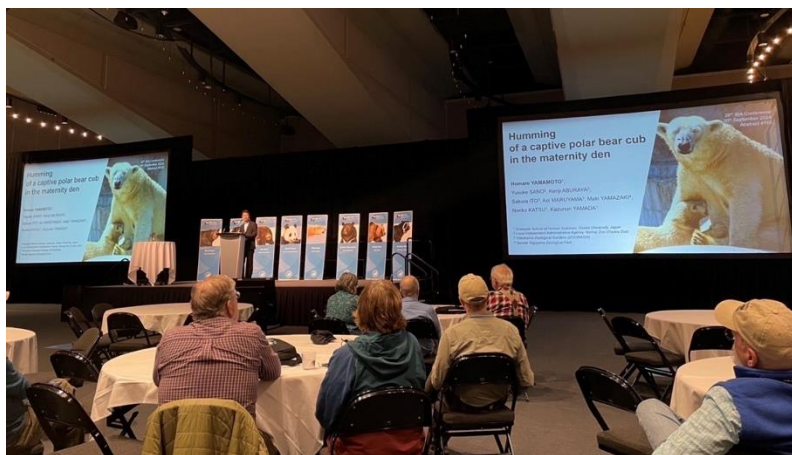
28th IBA CONFERENCE 参加報告

山本 誉（大阪大学大学院 人間科学研究科）

この度、2024年9月15日から20日にかけてカナダのアルバータ州はエドモントンで開催された28th IBA (International Association for Bear Research and Management) CONFERENCE に参加しましたので報告します。まずは、本大会参加にあたり、国際学会参加助成制度に採択していただいた動物の行動と管理学会の皆さまに感謝申し上げます。今回で国際学会の参加は2回目でしたが、現地での参加は初めてでした。開催地のエドモントンはカナダのアルバータ州の州都で、カナダで5番目に

大きい都市です。都市部近郊にはエルクアイランド国立公園があります。国立公園内を散策する学会主催のフィールドトリップでは、野生のアメリカバイソンやビーバーを見ることができました。

IBAについて簡単に説明しますと、クマの保全を目的とした国際的な組織であり、研究者や保護活動家などによって構成されています。今回IBAの参加を決めた理由は、私がこれまでに参加した学術会議が飼育管理や動物園に関するものだったため、別の視点から自分の研究に対するアプローチを受けたいと思ったからです。



皆さんは「クマの研究」と聞いてどのようなものか思い浮かべますか？私がこの会議に参加して一番驚いたのが研究テーマの豊富さです。クマの行動研究・クマの生息地研究・ヒトとクマのコンフリクト研究・国の歴史や文化からみたクマ観に関する研究・個体数推移に関する研究・孤児（野生下で産まれたが何らかの理由で母グマを失ってしまった）の子グマを野生に返すまでの研究...などなど、データの種類を問わない様々な研究がありました。世界中に分布している動物（クマ）だからこそ、ここまで多様なアプローチによって研究ができるんだなあ、ただただ圧倒される5日間でした。ちなみに、音声に関する研究は、私の知る限り私以外にいませんでした。



一番印象に残った発表は、Tawnee Dupuisさん（アルバータ大学）の「Black Bear Habitat Use and Movement in Response to Wind Energy」です。風力発電の風車を山に設置する際、その工事前・中・後でアメリカクロクマ（*Ursus americanus*）の生息地利用がどのように変化するかという内容でした。英語の聴き取りが少し苦手な私でも、スライドの構成やデザインが分かりやすく視覚的に理解することができたため、印象に強く残っています。彼女の発表は今大会の学生口頭発表MVPを獲得していました。国際学会で評価されるためには研究の面白さはもちろん、私のような英語を聞きなれていない人でも簡単に理解できるよう、視覚で訴えるプレゼンスキルも大事な要素だと感じました。

私は「Humming of a captive polar bear cub in the maternity den」という題目で口頭発表を行いました。発表順は115ある口頭発表のうち最後から2番目。学生の中ではトリを務めました。発表内容は、天王寺動物園と共同で行ったささ鳴きの発達変化研究を軸に、昨年度ホッキョクグマが出生したよこはま動物園ズーラシアと仙台市八木山動物公園の動画データを解析し、新たな課題として浮上した、録音環境の整備に関することなどを盛り込みました。

ささ鳴きは、子グマが発する音声の一つで、カンマ数秒の短い休息を挟みながら大きな音声が数分間持続するという特徴があります。ささ鳴きは、子グマが母グマの乳首を咥えているときに発せられることが確認されていることから、授乳に関連した音声だと考えられています。私はささ鳴きを利用して子グマの発達や健康状態を調べることができないか、動物園と一緒に共同研究させていただいています。

発表時間は12分間。練習する度に30秒ほど余ったため、発表本番では当初予定していなかったささ鳴きの認知度調査を試みました。私が発表するまでの会期中、多くの人と話す機会があったのですが、ささ鳴きを知らない人がいることが分かったからです。ささ鳴きを知っていたら挙手してもらおうという形をとったところ、会場には200人ほどいたでしょうか、約8~9割の方がささ鳴きを知っていることが分かりました。突然の思い付きではありましたが、インタラクティブな発表が受け、聴衆の注目を集めることができたと思います。

発表後、ホッキョクグマ研究の第一人者であるAndrew Derocher 先生が私の所へ来てくださいました。「私の論文、しかもかなり昔のものを見つけて引用してくれてありがとう。これからも研究活動がんばってください」と先生からお言葉をいただきました。今回の発表スライドはもちろん、修士論文執筆の際には幾度にもわたり先生の論文を引用させていただきました。一瞬の出来事でしたが先生に私のことを知っていただけだけでもこの会に参加してよかったと心から思います。

まだお話ししたいことはたくさんあるのですが、長くなってしまったためここまでとさせていただきます。現地で参加した初めての国際学会、とても充実した時間を過ごすことができました。毎年の開催ではないため次回は未定ですが、機会があればまた参加したいと思います。最後になりましたが、本研究を進めるにあたって多大なご協力を賜った、地方独立行政法人天王寺動物園の皆さま・よこはま動物園ズーラシアの皆さま・仙台市八木山動物公園の皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

編集後記

萩原 慎太郎（福山市立動物園）

ニューズレター14号の発刊が遅くなり大変申し訳ありませんでした。執筆いただきました方々には、感謝申し上げます。そして、残念ながら次号15号が最終号となります。最後まで頑張りますのでよろしくお願ひいたします。本記事へのご意見などがありましたら、萩原 (hagiwara_s@animbehav-tokai.com) までよろしくお願ひします。